

令和7年度第4回社会教育委員の会議

令和7年10月9日(木)

午後2時00分開会

開催日時	令和7年10月9日	開会14時00分 閉会16時00分	
場 所	前原暫定集会施設 A会議室		
出席委員	議 長 笹井 宏益 副 議 長 金澤 大恵 委 員 藤森 光一 委 員 北澤 隆司 委 員 伊丹 文男	委 員 小林 浩 委 員 鈴木 哲也	
説明のため出席した者の職氏名	生涯学習部長 平野 純也 生涯学習課長 濱松 俊彦	図書館長 三浦 真 公民館長 鈴木 茂哉	
事務局	生涯学習係長 最所 拓也		
傍聴者人数	0人		

日程	議 題	
第 1	議 題	<p>(1) 東京都市町村社会教育委員連絡協議会第5ブロック研修会について</p> <p>(2) (仮称)第5次小金井市生涯学習推進計画策定について</p> <p>(3) その他</p>

金澤副議長 定刻になりましたので、令和7年度第4回社会教育委員の会議を始めたいと思います。

本日は新井委員、池田委員、渡邊委員よりご欠席の連絡をいただいております。

まず、事務局のほうから資料の説明をお願いいたします。

最所生涯学習係長 本日の次第の2番に記載がございます、皆様にお配りしている資料1と2、図書館だより、月刊公民館9月号、10月号、社協会報97、小金井市の図書館の令和6年度版というところで、そちらの資料と、こちらの新春市民の集いという資料がございます。こちらは、きたるべき日に宮地楽器ホールでイベントがございまして、広報秘書課から社会教育委員の皆様にはぜひお配りしてほしい、参加をしてほしいという依頼がありましたので、皆様にお配りしている次第でございます。事務局のほうでイベントの詳細については把握してございませんが、何か不明点ございましたらそちらのお問い合わせのほうにお電話していただくか、もちろん私を経由しても構いませんので、できればご参加をくださいといった案内になっておりますので、よろしくをお願いいたします。説明は以上です。

金澤副議長 次に進みます。

それでは、議題2に入っていきたいと思います。東京都市町村社会教育委員連絡協議会第5ブロック研修会について、事務局よりご説明をお願いいたします。

最所生涯学習係長 資料1をご覧ください。

こちら本日も、配布させていただいております。小金井市は第5ブロックというところに所属をしており、その5ブロックの中で、今回は調布市が幹事市として研修会を実施するということになってございます。日程については、前回の会議等でお示しさせていただいたとおり、11月9日の日曜日になっておりまして、そちらのほうにぜひご参加をしていただきたいということになってございます。本日でできれば出欠の確認というところで、確認させていた

だきたいと思います。まだわからないということであれば、後日メールでよろしくお願ひいたします。場所は調布駅から近いので、歩いていけます。ぜひご参加をお願ひしたいと思います。6団体ぐらいですけど、毎年、幹事市の方が、ブロックを代表してこういう研修会をやるということになっております。実は小金井市は令和8年度に幹事市になっておりまして、令和8年度のこの時期に実はこの研修会を実施する立場にあるというところでもありますので、ぜひご参加をよろしくお願ひいたします。

説明は以上です。のちほど出欠の確認だけさせていただきます。

金澤副議長

ありがとうございました。

ただいまご説明がありましたとおり、令和8年度のブロック幹事市は小金井市なので、今回、ご都合の合われる方がおられましたら、11月9日にご参加をお願ひいたします。

続きまして、第5次生涯学習推進計画についてです。

最所生涯学習係長 資料2をお開きください。

施策の体系図というところで、市における計画の位置づけ、基本目標、基本方針といった関係性等をご説明させていただきまして、第5次の計画の施策の体系図案として、前回お示しをさせていただいたところになってございます。そこで、学びに関して、学べる、つながる、送る、支えるといった4フェーズにわけて生涯学習を進めていくとご説明させていただいておりました。ここまでは前回の会議でご承知いただいたものと認識してございます。小委員会のほうを実施いたしまして、小委員会の皆様に施策の体系図についていろいろ議論していただき、その議論の結果を今回、施策の体系図の修正版というところでお示しをさせていただいたところでございます。前回、お配りした資料に比べまして、見た目こそ変わっておりますが、基本的な考え方は変わってございません。生涯学習の大きな目的であるウェルビーイングの実現を見据えて、教育基本法第3条のあらゆる機会、あらゆる場所において学習できること、またその成果を活かせる社会の実現ということを目指していこうというところが今回のテーマとなっております。この辺りは教育目標や基本方針とリンクした考え方となっておりますということを前回ご説明させていただいたところでございます。今回、事務局から

お示した資料については、中央教育審議会生涯学習分科会で、国の教育振興基本計画や、近年策定されております様々な自治体の生涯学習計画を参考にいたしまして、先ほど申し上げたことをよりわかりやすく伝えるようにするために、前回お示した4つのフェーズを3つにわけ直して施策の体系図を見直しております。

資料をご覧ください。左端に基本方針がございます。こちらについてが「学びを通じた豊かな人生と社会の還元」となっておりまして、ここは現在策定中の教育委員会で基本方針案より踏襲しております。教育基本法第3条の趣旨を踏まえた形でこのような設計をしております。先日のメールで流させていただきましたキャッチコピーといったところが、今現在「学びを通じた豊かな人生と社会への還元」となっておりますが、わかりやすいキャッチコピーとしてこんなものがよいといったところがありましたら、後ほどご議論いただければと思っております。

次に施策をご覧ください。基本方針の隣です。前回の資料につきましては、施策を4つお示しておりましたが、今回は3つで集約をしております。1「いつでもみんなが学べる機会の提供」というところで、ここではいわゆる学び始めということで、生涯学習の入口を始めるきっかけを提供するといったものになります。続きまして、2「学びを活かし地域とつながるしくみづくり推進」です。学びを活かし、学びを通じてつながる地域づくり、人づくり、そういったことをより広げていくといったものになります。3「学びとつながりを支える環境整備」となっております。生涯学習を実践していく中で、土台となる施設の充実であったり、ICTを活用した学びの推進であったりというものを掲げているというところになります。学びを始める、学びを活かす、つなげる、学びを支える、この3フェーズで今回は構成しているというところでございます。ウェルビーイングの実現や自己実現の達成を目的に、いつでもみんなが学べる環境づくりや、学びを活かして地域とつながる、地域をつなげる支援を我々行政が下から学びを支えるというような実施内容のご説明かと思っております。

続きまして、一番上の欄の施策の方向性をご覧ください。ご説明しました施策1番、2番、3番にそれぞれ施策の方向性としてぶら下がっております。また、その施策の方向性の右隣には、主な取組といたしまして、主要な事業を想定したというところを記載してご

ざいます。

施策の方向性について、上から順に説明させていただきます。初めに、「0～100歳までの学習機会の提供」というところです。これは学び始めの機会の提供となっております、第4次と同じフレーズとなっております。乳幼児から高齢者までの世代ごとに様々な生涯学習の主要な事業としております。続きまして、「一人一人のキャリア（人生）に応じた学習機会の提供」というところです。ここでは歴史や文化、大人の学び直し、障がいや様々な国籍を持ちの方の生涯学習といったところで、それらを対象とした事業を想定してございます。次に、「学びを活かす人づくりの推進」です。こちらはボランティアセミナーや地域での生涯学習を広げる人物の育成を目的とした事業を想定してございます。次に、「学びを通じたつながり・地域づくりの推進」では、地域や学校、社会教育団体や高等教育機関、NPO法人とのつながり、または文化・スポーツを通じた仲間・地域づくりといった事業を想定してございます。次に「学びを活かす場所の充実」です。学習成果を発表する機会の場所の充実というところで、市民文化祭、公民館まつりなど発表の機会の充実を想定してございます。次に「わかりやすい情報発信・相談体制の推進」です。これは我々行政側のものですが、市の公式ホームページや市の公式エックスなどを活用して、わかりやすい情報発信をしていくという事業を想定してございます。次に、「生涯学習関連施設等の整備」となります。社会教育施設である図書館、公民館、また総合体育館や上水公園の整備を事業として想定しております。最後に「ICTを活用した学びの推進」です。デジタルディバイトの解消や、ICTを活用した公民館の講座の開催等を想定しております。

施策の体系図の説明は以上となります。

今日は、施策の体系図の更なるご意見や内容の確認等、ご意見とさせていただくといったところをやっていくとともに、計画本文のほうに反映させていきたい内容や事業、こういった考え方を本文の中に入れてほしいなど、そういった内容をお伺いして、次回小委員会につなげていきたいと思っております。ちなみに前回の小委員会は9月30日に実施をしてございます。その中で、施策の体系図をお示ししているのですが、そのとき出た意見を紹介させていただきます。4つのフェーズを3つのフェーズに変えたといったところをまずご説明をさせていただいた後、施策の1「いつでもみんなが学べる

機会の提供」といったところでは、学習機会の提供となっているが、学習を受けるだけではなく、主体的に学習するスタイルに変更していくような取組が必要なのではないかといった意見が挙がっております。また、学べるきっかけづくりというようなことではあるが、学習はつまらないものといったものではなく、学習は楽しいものだというように、その楽しさを伝える取組が必要ではないかといった意見として挙がっております。続きまして、施策の2です。「学びを活かし地域とつながるしくみづくりの推進」では、委員の方から2番の言い回しについてもっと浸透しやすい表現がよいのではないかという意見が挙がっております。こちらには文化・スポーツと書いてあるのですが、こちらは当初、文化が入っておらず、「スポーツを通じた仲間づくり・地域づくり」となっていました。文化の観点が必要ではないかというご意見がございました。また、「学びの成果の発表の機会」の中では、学びを発表するだけではなく、その後その発表した者同士がつながるといった機会の提供があったほうがよいのではないかというご意見がありました。また、全体のつながりといった表現の中で、地域で人と人をつなぐ役割が必要であるといったところで、いわゆる市民協働センターや社会教育コーディネーターといった役割があれば、地域で地域活動したいといった人同士がつながれる。そんな役割を市民協働センターや地域教育コーディネーターという役割が担ってくれている自治体が横浜市などの自治体であるので、ぜひ参考にしてほしいといったご意見がありました。施策の体系図の3「学びとつながりを支える環境整備」では、相談体制の充実の主要事業の中で、福祉総合相談窓口といった内容に変えてございます。また、公共施設のあり方検討委員会という、企画政策課が実施しております公共施設のあり方を考えるワークショップに参加した際に感じたことなのですがといったことで、現状の公共施設のあり方は、例えば図書館であるからこういう使い方ができるのではないか、公民館だからこういう使い方ができるのではないかという考え方ではなく、市民が使う公共施設とはというような新しい時代に合わせた公共施設の再定義といったところが、図書館、公民館の中で必要ではないかといったご意見をいただいております。9月30日の小委員会のほうでの様々な意見を踏まえまして、施策の体系図をブラッシュアップして、本日提出させていただきます。

金澤副議長 ありがとうございました。

最所生涯学習係長 また、キャッチコピーについては、本会議のほうの皆さんに決めてもらったほうがよいのではないかというご意見がございました。現状、キャッチコピー、基本方針といったところで、教育委員会の基本目標、基本方針である文言をそのまま引用しているところ です。そういったものではなくもっとわかりやすいもの、こういうものがよいといったものがあれば、ぜひそちらを採用したいというご意見がございましたので、もしご意見があればお願いしたいと思 います。ちなみに前回の生涯学習推進計画のほうでは、読み上げま すと、「学びでつながる笑顔のまち小金井～さあ、動き出そう！人 生100年時代～」といったキャッチコピーが第4次計画では採用さ れております。第3次計画では、平成28年4月からのものですが、 「学びの継承・未来への創造～学びでつなぐ 人・まち・小金井～」 です。ちなみに第2次、平成21年ですが「共に教え合い・学び合い・ 共に育つ生涯学習のまちづくり」という形になります。何かよいキ ャッチコピーがあればご意見をいただきたいと思います。本日、渡 邊委員がご欠席ですが、欠席のご連絡をいただいたときにいただい たキャッチコピーを発表させていただきます。「楽しい学びは人生 を豊かにする」といったキャッチコピーがよいのではないかという ご意見をいただいております。なるべくシンプルなものがよいとい うご意見です。

金澤副議長 ありがとうございます。「楽しい学びは人生を豊かにする」とい った意見が既に出ているということです。今説明していただきました この体系図の基本方針と書かれている左側の現在「学びを通じた 豊かな人生と社会への還元」とございます。この点について、この ような単語を入れたらどうかというご意見はございませんか。

濱松生涯学習課長 説明があつたとおり、この基本方針の改定というは教育委員 会で今まさにやっていることです。これの具体化というところの計 画というところもあるので、まずこの基本方針を踏まえていただき たいというのが原則としてあつた上で、前回の小委員会の中でも、 計画をいろいろな方に浸透させていくというワードのチョイスな

どのお話があったと思うので、広く周知していくためにそういったものがあつたほうがよいのか、なくてもよいのか、もし必要であればどういったものがあるのかということをご議論いただければというのが前回の小委員会の議決です。

金澤副議長 第2次、第3次、第4次は「小金井」が入っていたのは偶然であるということですね。なくてもよいし、入れてもよいですね。

伊丹委員 その前に、これはどういったところに出回っているのですか。今回、私は委員になって初めて見ました。ここまでやっていたら知らなかったと知りました。今まで見たことがありませんでした。どこで見ることができるのでしょうか。

最所生涯学習係長 ホームページに載っているほか、有料で販売をしております。

伊丹委員 それを知っている市民がどれくらいいるのでしょうか。ホームページに出ているかもしれませんが、市のホームページは自分の目的があつたときにしか見ません。例えば無料であるか、有料であるか、それは議論があつても、大変な委員を引き受けたなというのが正直なところですよ。家内も知りませんでした。こういうことを教育委員会でやっているのか、その辺の基本的な問題を私が知らないだけなのか、私が一般的な市民なのか、それはわかりませんが、この会議だけでキャッチコピーを決めたからといってそれがどうなのということしか私には関係がないです。

濱松生涯学習課長 そうですね。この計画の周知に関するご質問かと思いますが、基本的には市役所の中ではたくさんの同じような計画がございます。我々は生涯学習課なので生涯学習の計画がございますし、一番上の長期総合計画という市の大きな計画のもとにセクションごとにこういった計画がたくさんございます。おそらく市内すべての計画を網羅している方はそんなに多くないと思います。計画のつくり方として、計画によっていろいろ特色はあると思いますが、基本的に必ずパブリックコメントを実施いたします。そのパブリックコメントを実施する際には、必ず市報やホームページに載せてから計画の策定をするようにいたしておりますので、基本的にはどういう計

画をいつ頃つくって、計画の中身はどのようなものかというのは、必ず市報に掲載されることになっております。市報に掲載されたときに、今おっしゃったようにホームページをご覧になれない方などは、公共施設にその素案というものを置くような形になっております。行政のたくさんある計画のすべてをできました、見てくださいというようにすることはなかなかできません。ただ、こういった計画をつくる際には必ず広報等で周知を可能な限りした上で、市民の皆様のご意見を伺ってつくるといった形になっております。確かにご覧になっていないという市民の方はいらっしゃるというのは、周知の問題もあるのかもしれませんが、我々としては生涯学習に携わる方や関係者の方にはこういった計画ができたということをお伝えさせていただいた上で、中身を把握していただくように努めるべきだと考えます。市民12万人いらっしゃる、全員がご存知かというところではないだろうと我々としては把握しているところでございます。

鈴木委員

僕は今改定している「明日の小金井教育プラン」という、どちらかというところ生涯学習ではなく学校教育分野の同じような指針のプランの策定委員です。そんなにたくさんは刷られていなくて、それとは別に見開きになったようなダイジェスト版というものがたくさん刷られていて、それが配られる人もいます。立派な冊子になったものは公民館に置かれていたり、各学校に配布されて、そういうものに興味があるというか、ちゃんとそれに沿ってやっという先生に関しては、それは手元に置いて照らし合わせながら授業の計画を進めていただいているという方もいらっしゃいます。ただ一方で、先生であっても「明日の小金井教育プラン」施策指針のハンドブックを知らないという人もいらっしゃいます。必要な人のところへすべてそれが届いているという形ではないのだと思います。役所のほうも事務局も努力はしてくださっているとは思いますが、そこは検討課題だと思います。今の時代であれば紙にしなくても伝える方法はたくさんあると思いますし、その辺のところはあるのではないかと思います。以上です。

金澤副議長

鈴木委員ありがとうございます。藤森委員お願いいたします。

藤森委員 基本方針の「学びを通じた豊かな人生」というところまでは、まさにその通りだと思います。そこはそのままよいのですが、一方で「社会への還元」については気になるところです。学校教育もそうですが、私は子どもがメインなのですが、子どもが賢くなり、賢くなった上で将来日本の役に立つべきだという、要は社会に還元することが目的なのだという、この文言が入ってしまっています。最終的に、あなたを育てたのは日本で役に立つためですよということになります。社会への還元が入ってしまうのはどうでしょうか。結果的に役に立つのはよいです。初めから社会への還元ありきで、学びを通じ豊かな人生を築いていってほしいという、この教育がどうしても透けて見えるところが嫌だと感じます。先ほど渡邊委員から提案があった「楽しい学びは人生を豊かにする」というのは上の部分を使っていたと思います。文言は私からこれがよいというものはないのですが、「社会への還元」はあまり強調せず、上の部分の「学びを通じた豊かな人生」というところをもう少しアピールするという形がよいのではないかと思います。

金澤副議長 藤森委員ありがとうございます。確かに最終的にそうなるのは、よかったねという話ですが。

藤森委員 結果的にそうなるのはよいのですが、それを求められるようなキヤッチフレーズはどうかと思います。ただ楽しむために学びたいとか、趣味というのは将来的に社会に還元するものですか。学びの範囲を狭めてしまうような気がします。

金澤副議長 確かにそうですね。貴重なご意見ありがとうございます。

鈴木委員 これについて教育長と話したときに、「社会への還元」というところは、学んだことを広めてもらいたい、そして広がっていく中で、また次の人がそれを学んで段々その学びが広がっていくということが理想だという位置づけだとお話したときに考えていたので、必ずしもこの表現でなくてもよいと思っています。

金澤副議長 循環という感じですね。

鈴木委員

いろいろなものに今まで関わってきましたが、正直言うとみんな硬いです。例えば、伊丹委員がお話になっている通り、最初の何ページかは興味を持ってパラパラとめくったとしても、「学びを通じた豊かな人生と社会への還元」と言われた段階で閉じてしまいます。そこまで立派な人間じゃないと思ってしまうのではないのでしょうか。それであれば、どんどん敷居を低くしてあげて、この中でも多分たくさん文言として出てくると思うのですが、人生100年というわけですね。これは僕が勝手に思いついたのを書いてきたことなのですが、「100年人生楽しもう、あなたの学びをまちへ、人へ伝えよう」や、「今日が楽しく明日が待たれる人生を、あなたの学びを世界の幸せに活かそう」といったものを考えました。「還元」というようにしてしまうよりは、「さあ、やりましょう」という呼びかけのほうが僕はキャッチとしてよいのではないかと思いました。以上です。

金澤副議長

鈴木委員、貴重なご意見ありがとうございます。「100年人生楽しもう」はとてもよいキャッチではないかと個人的に思います。

北澤委員

前は「学びにつながる笑顔のまち」でした。これくらい親しみのある言葉のほうがよいです。もう少し柔らかくしてもよいと思います。ただ、鈴木委員の言われていることは非常によいと思います。

金澤副議長

総合すると、藤森委員の「社会の還元」が目的になってしまう感じではなく、鈴木委員がおっしゃって小林委員が賛成した「楽しもう」、「100年」もありますし、何か未来が感じられるようなビジョンになるとよいですね。北澤委員も同じようなご意見でした。伊丹委員、キャッチコピーに関して何かありますか。

伊丹委員

私は高齢者の代表の立場で考えようと思っています。先ほど藤森委員がおっしゃったように、子どもたちを中心に考えるのは当然のことだと思います。我々のような高齢者になると、どうやって高齢者の方々をクラブ活動等に引っ張り出すかということが一番の大きなテーマです。そのようなときに、まずはキャッチコピーの前に高齢者をどうやってそのような媒体にまで持っていくかということに引っかかります。私は写真が好きで写真クラブをいくつか持

っています。小平の写真連盟というところで写真展を今やっていますが、働く人間、体を動かせる人間が4、5人しかいなくて、会場づくりもできない状況です。最終的には今年度で小平の写真クラブを閉めることになりました。写真の文化というものは残さなければなりませんし、それを残すためには80代ではなく60代、70代の人たちに動いてもらわなければいけません。しかし、その人たちにラインやフェイスブックの話は通じません。私は好きだからやってはいますが、通じないことが多いです。今日は渡邊委員がお休みですが、年代的には私の次の世代なのでご意見を聞いてみたいと思いました。若い人たちはどんな媒体でもよいです。スマホですべてが通じると思っているらしいです。年寄りはそのではありません。その辺は考えていただきたいと思います。内容はよいのですが、どうやって伝えていくのか真剣に考えていることです。

金澤副議長

ありがとうございます。小林委員いかがですか。

小林委員

今のお話を聞いていて、これは施策の後ろのほうに入ってくる話なのですが、例えばそういったものが廃れていくとか、守らなければいけないという価値観があるとして、やらなければならないと思うとすぐきついで、面白そうだなと思ったらやってくれるかもしれないという部分があります。面白いと思ってもらえるように工夫をしなければいけませんし、そこを何か仕掛けないといけません。工夫は必要です。例えば、市報で見て面白いですとあっても、本当だろうかと思ってしまうよね。だけど、誰かお友だちに面白いよと言われたら、ひょっとしたら興味につながるかもしれません。実際の施策のもう少し後ろのほうで、僕も同じ課題を持っているので、そこはまたそこで話ができたと思います。

金澤副議長

ありがとうございます。今50代の我々も10代の頃があったわけですので、みなさま同じだと思います。最初からあれば、これはボールペンだということがわかりますが、うちの父は鉛筆を削るために最初にナイフの使い方を教わるような世代を生き、そういう意味では、世代ごとのギャップ感は埋めることは難しい場面もあるかもしれませんし、デジタルやIT技術の革新もあります。小平の写真クラブがなくなってしまうのは由々しき問題の1つだと思います。私は

オーストラリアに友人がいるのですが、その友人の子どもが仲良しだと言って連れてきた人が70代、80代の方で、何でつながっているかというと紙飛行機だそうです。小林委員が言われた楽しいと思うこと、鈴木委員がおっしゃった学びを伝えようといったこと、そういうことで融合していくことができ、だれか別の人に、例えば僕が知っていることを教えるよということになると、もっと活性化していけると思います。そのようなこれからも活性化していけることはなにかを話し合うのが私たちに課せられた社会教育委員の使命だと思うので、こういった話し合いができるということは充実した会議であるといえると思います。北澤委員と同様、私も言葉は思いつきませんが、このような会議を1つ1つ重ねると市民の皆様のためになるのではないかと考えております。

最所生涯学習係長 議論をしていただいたところの確認ですが、今、教育プランをつくっております、教育委員会、学校教育のほうでやっているのですが、そのスローガンが「笑顔いっぱい わくわくいっぱい」というものになっております。今回、皆様をお願いしているのは、教育方針の「学びを通じた豊かな人生と社会への還元」は、あくまで教育委員会の基本目標、基本方針ということで定まっておりますので、それを変えるというところではなくて、いろいろな方に浸透させるためにどういった表現がよいのかといったときに、教育委員会は「笑顔いっぱい わくわくいっぱい」といった表現を使っています。そのような本当にわかりやすい、高齢者から乳幼児まで浸透しやすいキャッチコピーを皆さんに考えていただければと思います。よろしく願いいたします。

金澤副議長 今日、結論を出すのでしょうか。

最所生涯学習係長 今日はいろいろなご意見を出していただければと思います。

小林委員 まず、「学びが楽しい」ということは、伝えたい部分の1つです。「還元」とあったのは、学びが個人だけに落ちて、それで終わってしまうのは寂しいし、広がらないから学びの楽しさや自分でつながったりというものを広げたい、学びが楽しい結果として何か広げたり伝えたりということが結果的に社会還元につながるということ

だと思います。その2点だけしっかりと押さえて、学びが個人に集約しないで終わらないというところが2番目だと思いますので、その2つのポイントを押さえた上で、みんなで考えましょうというところでまとめてよいですか。

藤森委員 今小林委員がおっしゃったことと同じなのですが、「ともに学び合う」という文言を文章の中に入れてはどうでしょうか。学びは1人でもできるし、複数でもできます。言葉のイメージに「複数人」とイメージさせるものが入っているとよいと思います。単純でシンプルですが、「ともに学び合う」というフレーズがよいと思っています。子どもの教育もそうなのですが、今はウェルビーイングとよく言われます。もともとウェルドゥーイングという、できる人ができない人をよくしていくという考え方もだめで、ウェルビーイングということになっています。その先を考えたときに、ウェルビカミングウィズという言葉があって、ともによくなっていくということで、よくしていくのではなく、よりよくなっていくというものです。ともに学んでよくなっていくという雰囲気ワードがよいと思います。

金澤副議長 貴重なご意見ありがとうございます。

鈴木委員 「笑顔いっぱい わくわくいっぱい」は、3次を決めるときにかなり強く推したワードです。それまでは「緑がもえる〇〇小金井市」といったような、もう覚えていないようなものでした。そのプランの最初のときに、誰も見ませんし、読んでも何を言っているかもわからなかったのが、ぱっと見て「笑顔いっぱい わくわくいっぱい」ということがわからない人はいなかったので、これにしましょうと言って決まりました。そのときにコンサルの方が難色を示していたのですが、結果として今も残っているので、それはよかったと思います。

濱松生涯学習課長 事務局としての考え方としては、先ほど藤森委員から「還元」は強要されるような、そこまではっきり言われてはいませんでした。そのようなニュアンスが含まれるのではないかと思います。我々としてはまったくそのような意図は毛頭ございません。国のほうで

今行われている中教審と呼ばれるところの整理の中でも、生涯学習、社会教育が果たすべき役割として、ウェルビーイングの実現というのが掲げられております。ウェルビーイングの定義として、個人の幸せと周囲の場のよい状態をつくるというようなことが挙げられておりますので、個人の幸せという部分であれば個人で学習していただければ結構なのですが、教育基本法の3条の生涯学習の成果を適切に活かすことのできる社会の実現という、その法の理念に基づけば、個人の学習に留まらず、その成果を活かしていただくことによって、ウェルビーイングが実現できると考えられると思っております。還元というのは、何か返せというニュアンスではなく、みんなでも共有、シェアをしてウェルビーイングの状態をつくっていきましょうという趣旨でございます。方針としては、教育委員会としては定めたというのが1つございます。先ほど申し上げた通り、それをもう少し砕けた言い方をして、「学びの楽しさ」とか、そういったみんなでこうやっていくんだというようなところをキャッチコピー、スローガンというところで、この計画の中に示していければよいと思います。その部分については、皆様からご意見を頂戴したいと思っております。この辺りは事務局のほうで整理させていただいて、小委員会のほうで少しご議論いただければと思っております。また、今後の進め方について、先ほど伊丹委員のおっしゃったことと少し関連するのですが、高齢者の方の社会参加の話がありました。これは今、我々教育部門で、このような全体的なお話をしていますが、高齢者の社会参加というのは福祉部門となります。課題や細かい事業は持っています。おっしゃった通り、特に男性が引退された後、ご自宅から出てこないという社会的な課題があり、特に男性の方は社会参加とどうつなげていくかという全国的な課題がある中で、個別の事業であるとか、取組というのは実際小金井市でやっているところではあります。そういった取組は、伊丹委員が課題だと感じていらっしゃることを生涯学習計画に吸い上げてくるとすれば、福祉部門でやっているものをもう少し生涯学習の視点から捉えて、計画の中の事業に落とし込んだり、具体的には生涯学習で何かをしていこうというよりは、市役所の中でやっている事業に生涯学習的な視点を持たせて、この計画の中に落とし込んでいくというような作業がこれからはなされるべきというのは事務局としては感想ではございます。そういったところも含めて、次回以降、小委員

会の中で体系図に基づいて具体的な計画の中身の文章の検討に入っていくわけですが、今申し上げたようなニュアンスが表現できればよいと思っております。伊丹委員から今日の時点ではそういったところも課題と感じていらっしゃるというのは意見として承りましたので、今後、整理させていただければと思っております。よろしくお願いたします。

金澤副議長 他にご意見はございませんか。基本方針が決まると、中の言葉もそれに紐づいていくと思います。合わせて濱松生涯学習課長が今言われたように、小委員会のほうでご意見を賜り、それを共有するという形になるかと思えます。皆様、いかがでしょうか。

(賛成の声)

金澤副議長 ありがとうございます。

鈴木委員 面白くする、わくわくする、学びたいということを促すのであれば、今までみたいに、「ありますよ、どうぞ」とやっていたらわくわくが楽しいということは伝わりません。やり方を変えていかなければいけないという意味合いは持たせたほうがよいと思えます。学びの機会を提供するのであれば今まで通りでよいわけです。そこは次の小委員会に向けて少しご検討いただければと思えます。

最所生涯学習係長 体系図の施策1のところですね。

鈴木委員 そうです。そうすると、公民館も図書館も「幅広い世代の学びの提供」だけではなく、もっと役に立つ、例えば新しい時代に備えた講座をもっと増やしますよとか、そういうことの中身を考えますとか、きっかけにするような、それを促すような記述にしないと今までと一緒によいということになってしまいます。

金澤副議長 笹井議長がいらっしゃいました。よろしくお願いたします。

最所生涯学習係長 ご議論をいただいて、キャッチフレーズというところでご意見をいただきました。進め方は、事務局のほうで検討させていただい

て、皆さんの意見を集約させていただきます。また、どこかのタイミングでお知恵をいただくかもしれませんので、よろしくお願いたします。議事としましては、私のほうで施策の体系図のほうのご説明をさせていただいて、9月30日の小委員会の内容も踏まえて説明させていただきます。今回の体系図を事務局からは提示させていただきますまして、委員からご意見等いただいて、再度ブラッシュアップを重ねていければと思っております。よろしくお願いたします。

笹井議長

大変ご迷惑をおかけしました。今お話あったように、体系図について、どういうご意見お持ちかということのを率直に出していただきたいと思えます。計画の構造というのは、上位目標があって、中位目標があって、下位目標があって、これが体系になります。最後に施策や事業がぶら下がるというイメージです。上位、中位、下位の目標をどのように決めていくのかがとても大事です。どのように決めていくかといったときに、小金井の市民が何を求めているのか、小金井の地域の課題とは何なのかということのをボトムアップで積み上げて目標とします。もう1つは、行政計画なので、総合開発計画や総合計画があります。上位の計画で小金井市全体の目標は決まっていると思えます。それは何でしょうか。

最所生涯学習係長

今お話がありました、小金井の最上位計画については、小金井市基本計画というものがございまして、令和8年4月から後期基本計画がスタートするとなっております。後期基本計画のほうは、私どもの生涯学習推進計画と同じような形で進んでおりまして、今パブリックコメントの実施をしているところです。先ほど言った目標ですが、市の目標は将来像として「いかそうみどり 増やそう笑顔 つなごう人の輪小金井市」ということでキャッチコピーのような感じなのですが、こちらが1つあります。基本構想の中では、施策20で生涯学習の推進があります。こちらのめざす姿で、「誰もが生涯を通じて学ぶことができる環境や機会を持ち、人生100年時代に向けて地域コミュニティとのつながりを活かし、自己実現と地域貢献ができるまち」が基本構想で定める生涯学習分野での大きなめざす姿という形になっております。

笹井議長

市全体の方向づけというか、小金井市全体の方向づけとして、例

えばいろいろなまちがあって、教育の町や健康のまちづくりなど、そういう色がついた方向づけがあると思います。小金井市の場合はないのですか。

小林委員

あまり聞いたことはないのですが、市の関係者や市長、いろいろな方々から聞くと、市民活動が20年前は盛んで、市民の活動も自主的なものがすごく多く、すごく進んでいたという小金井の特色があり、それを活かしたまちづくりといったことを皆さんおっしゃっている方も多いですし、委員の方もそういうことをおっしゃる方が多かったのですが、今見てみると、地域社会や地域活動といったものに対してだんだんやってくれる方が少なくなってきて、どの団体も高齢化してきているというところがあります。そこは課題だという話は皆さん共通して言われているところです。先ほどもどんどん高齢化して活動が停止しているという話もありました。そこについては課題だということはいろいろな方と話をするに出てきていて、多分そういった意味で社会貢献にというワードが出てきたのは、また学びをちゃんとやった上で地域社会を活性化させたい、昔のような活気のある小金井にしたいというノスタルジックなものも含まれているのではないかと思います。私見として、1996年の第1次から全部調べたのですが、そういう印象は持っています。そういったところで社会貢献というところがまだ不十分であり、また活気ある小金井になってほしいという願いがあるのではないかと思います。やはり市民中心のいろいろな団体、いろいろなイベントが今どんどんなくなってきています。わんぱく夏祭りもとうとう終わってしまい、市民まつりも実は1回頓挫しています。今まで通りのやり方がどんどん通用しなくなってきているところがあり、20年間ずっと遺産で食っているみたいな感じで、それを何とかしたいという思いがあります。

伊丹委員

先月うちの協会で、倉橋良子さんの「99歳からのメッセージ」という講演会を行いました。倉橋さんから「昔は小金井のまちはすごく賑やかだったけれど、今は非常に静かになっちゃいましたね」というような言葉がありました。確かにそうだったなと思います。それが何なのかということをごういったテーマに基づいて深掘りしていくのか、私自身の考え方としては、ある程度やむを得ない時代

になってしまったのではないか、じゃあこういった世の中でどうするのだというように年寄りには考え方を変えなければならないと思ったりはします。

笹井議長 委員のおっしゃることは、市民が市民レベルでいろいろな活動をするというのが衰退してしまい、それを活性化すべきではないかというご意見ですか。

伊丹委員 そういうまちに戻らないかなという願いが入っているような気がしましたということです。

笹井議長 今おっしゃったのは、賑わいみたいなものですね。

伊丹委員 倉橋さんはそのような言葉を使っていました。もう少しまちが賑やかだったというようなお話でした。その当時、あの方は公民館を中心に公民館をうまく使おう、小さなことでもよいから公民館でいろいろなことをやりましょうということで活躍なさった方だと聞いています。小金井のまちが賑やかだったのに今は静かになっているということが大きなポイントなのではないかと感じました。

笹井議長 それは人との出会いやつながり、賑わいみたいなものが少なくなったということなのでしょう。

伊丹委員 小林委員がおやじの会をやっていらっしゃって、すごいなと思って感心していますが、このようなものは賑やかにするべきなのだろうと感じてはいます。

三浦図書館長 先ほどの質問に対する答弁を少し補足させていただきます。~~が間違っております。~~小金井市では基本構想を定めておりまして、令和3年から令和12年までの10年間の構想でございます。このフレーズが「いかそうみどり 増やそう笑顔 つなごう人の輪小金井市」というのが10年間の構想です。10年間は長すぎるので、前期基本計画と後期基本計画をその下をぶら下げまして、前期計画は今年度で終了しますので、令和8年度から12年度までの後期基本計画を今策定中というところでございます。今、基本構想は何かと問われた

ら、「いかそうみどり 増やそう笑顔 つなごう人の輪小金井市」が小金井市の基本構想フレームです。

笹井議長

それに従うと、「いかそうみどり 増やそう笑顔 つなごう人の輪小金井市」を生涯学習分野でどうやって実現するかということになります。抽象的ではありますが。「いかそうみどり」は、みどりをいかす生涯学習みたいなことをここに書かなくてよいのかということになります。つながりをどうやってつくっていき、それをもっとダイナミックに動かすことで賑わいをつくっていくということだと思います。そのための生涯学習計画で、生涯学習の活動とは何だろうということを考えていくことなのだろうと思います。枠組みそのものはよくわかりますし、この通りだと思いますが、小金井らしさみたいなものを感じません。無味乾燥みたいなところがあります。小金井的な色をどのように盛り込んでいくのかということが重要だと思います。

鈴木委員

そういうことだと思います。どこにでも書いてあるようなこと、どこでも言っているようなことではなく、本当に小金井市は4キロ四方しかない小さなまちで、いつでもお金がないと言っていて、できないと言っているところです。でも持っているものもたくさんあります。小金井の公園や武蔵野公園があり、国分寺の人たちが羨ましがるのが川べりです。そうすると本当にこの市にしかないものを活かして何とかしていくこと、それをうまく生涯学習に盛り込んでいくということが大事な視点だと思います。「いかそうみどり 増やそう笑顔 つなごう人の輪小金井市」と言われてピンときますか。植樹をするのですか。増やそう笑顔は具体的に何ををするのですか。つなごう人の輪はわからないわけではないのですが、どうやって人をつないでいくかというアクションはあるのか、それは何もイメージができません。先生がおっしゃっている通りだと思います。小金井市のカラーは何だろう、一番めざすものは何だろう、それをソプラノキーの高いところに置いて、1つ1つ生涯学習に紐づけていき、より小金井市にフィットしていくものにしていくほうがよいです。この生涯学習計画が何かを見て、いろいろな施策が打たれていくのだと思うのですが、そのときに自分たちの持っているイメージとやっている施策、イベントにフィットする、そういうことが大切です。

例えば盆踊りをいっぱいやりましょうというような話と、「いかそ
うみどり 増やそう笑顔 つなごう人の輪小金井市」というのだと
どうなのだろうと思います。せっかく小金井市は阿波踊りなど素晴
らしいものがありますので、そういったものを使って世代をつない
でいくとか、人の輪をつくっていくところを盛り込んでいく
ほうがわかりやすいと思います。

もう1つ、先ほど伊丹委員がおっしゃっていた中で、高齢化でど
んどん人が減っているという事実は間違いなくあると思います。単
純に健康なまま、まちの役から離れていく方もいます。お年だから、
コロナも4年挟みましたし、もう辞めさせてくれという方ももちろ
んいらっしゃいます。ただそれと並行して、子ども会も停止してし
まっているところがあります。高齢化だけで停止しているわけでは
なく、子ども会も停止してしまっています。人が集まらないからと
言われて、子どもはいないのかと思うと、現実には建売がたくさん
建っているわけなので子どもはいます。子どもはいるけれど、子ど
も会には入りません。じゃあこの子たちは何をしているのかという
と、共働きのお宅が多いので学童にいたり、小金井市の場合
は小学校4年生からは学童に入れないので習い事にしています。
そうすると、そこでは子どもたちに記録がついていて、お宅の息子
さんは何曲弾けるようになりましたとか、お宅の息子さんはうちの
塾で何点取って何番ですとか、何メートル泳げるようになりました
という、費用対効果がわかりやすくあります。自分の子どもにお金
をかけるといったことに傾いていってしまっている保護者が多い
ように思います。学校のPTAでも行事をやりませんかと言われても
委員にほとんど手が挙がりませんし、委員になったとしてもこの人
はこの日は無理ですとか、それは生活があるので仕方がないのです
が、本当に生涯学習計画でいろいろなものを見なければならぬとい
ったときに、世代を超えて、賑わいと先ほどもおっしゃっていま
したが、それがあるようなものにしていかないと、高齢者をどうや
って呼び出すか、子どもたちをどうやって呼び出すかというように
パートでわけていても、その人たちの考えが違うので、決して統合
されたまちの賑わいにはなっていないと思います。以上です。

笹井議長

なるほど。賑わいと言うとわいわいガヤガヤといったダイナミッ
クな概念ですよね。賑わいをどうつくるかは、つながりをどうつく

るのかと少し違うと思います。賑わいをつくるのであれば、一番手っ取り早いのはイベント事業です。それを継続するような仕掛けが必要になってきます。その際に、社会参加の問題があり、家からみんな出てこないということでは賑わいも何もありません。高齢者の方もサラリーマンの人も若い人も社会参加をしてもらい、イベントに参加してもらおうのだという仕掛けをどうするかというのはおっしゃるとおりだと思います。皆さん思っていることを出していきたいと思います。「いかそうみどり」があるのは、環境問題があるのでしょうか。

小林委員

僕はここにきて20年くらいですが、小金井の人はすごく地元が好きです。プライドを持っています。こんなに小さくて工場もなく貧乏なまちで、緑が多いし田舎だし、でもなんかここいいよねと根拠がないのにラブです。こういうところを楽しみたいと思っているし、いろいろあるという噂を聞きつけて引っ越してくる人たちもいます。地元愛が強く、その地元愛の象徴が多分みどりです。地元ならではのよさ、楽しさ、プライドなどをうまく使って社会づくり、まちづくりをやっていきましょうという意図だと思います。それをみどりという言葉で集約していると思います。みどりと直接的に捉えるのではなく、みどりに象徴される小金井の人たちの小金井愛でありプライドです。それなのにここにきたらなぜか人とつながれないよねとか、どんどんイベントがなくなってしまったり、子ども会もそうです。地域が面倒臭いと思っている人たちがたくさんいるわけですから、そういう人たちが面倒臭いと思わなくなるにはどうしたらよいかを考える必要があります。これまでは同調圧力で参加したのですが、もうそういう時代でもありません。じゃあそこをどうするかという話だと思います。みどりは好意的に翻訳するとそういう意味だと思います。

伊丹委員

都立公園が3つある市は他にないです。

鈴木委員

北澤委員ももともと小金井の方ですよ。本当に小金井愛が強いですよ。一昨日PTA年委員会があり話をしました。今PTAではトイレのことを一生懸命取り組んでいるのですが、自分たちの子どもの頃はトイレ掃除があったのに、なぜ今はしなくなったのかと

いう意見が出ました。そのうちの何人かがざわざわっとしました。その人たちは全員南中でした。50代くらいのお父さん、お母さんです。その頃からトイレ掃除はなかったということです。子どもたちも自分たちと同じ小学校、中学校で育っています。

伊丹委員 トイレ掃除はしなくても、教室の掃除はしているのですか。

鈴木委員 しています。感染症の関係があり、トイレ掃除をして感染したら誰が責任を取るのかという話で、そのような流れだと思います。

笹井議長 地域づくりの究極の目的は、地域を愛する人をつくることだと思います。地域づくりはお金もらっているわけではなく、ボランティアで自発性にやるわけです。愛着がなければボランティア的なことはやりません。長続きしないです。小金井がよいところだと思うから継続してやるわけです。少なからず委員の方がおっしゃっていて、小金井に愛着を持っている人が多くて、そういう人がたくさんいるというのがあれば、愛着を結びつけるような仕掛けみたいなものはすごく大事だと思います。

金澤副議長 この夏にスリランカの世界遺産にいきましたら、外国人は現地の人チケット代の40倍くらいチケットが高かったのですが、これはディズニーランドで千葉県の人が安いというレベルとは何倍も違いましたが、なるほどと思いました。それはありではないかと思える国家施策と感じました。例えば、小金井の講演も小金井市民だったら自由にきてもらおうとか、小金井最高！と思う仕掛けをたくさんつくるのができたらよいのではないかとヒントになりました。

小林委員 いったら知り合いがいて楽しいよねなど、そういう感じにつながっていると人間って楽しいですよ。

金澤副議長 そうですよ。そうだったらよいですよ。小金井桜100周年もヒストリーを見る機会があり、それでいくつかのことを知りました。昔は結構な人々が桜だけを見にっていて、江戸時代にはお弁当を売っていたり、今でいう屋台があったり、小金井も先ほどおっしゃったように、桜で賑わいみたいな。

小林委員 それで学び始めるとか、木の世話をしようかなという人が出てきてほしいのだけれど、そこをつなげることが多分市の皆さんがご苦労されているところだと思います。団体の方も苦労されているということが伝わってはいます。だからそこを社会教育で何かできないのかということです。

金澤副議長 一番不幸なことは知らないことだと考えています。もし知っていたら結果が変わる可能性もあるので、なにごとにもヒストリーを知るというチャンスも必要ではないかと思います。でもそうすると社会教育委員の枠を超えて、大きい話になってしまうかもしれませんが。

笹井議長 どうやって市民に小金井市に愛着を持ってもらうかです。愛着を持っている人はたくさんいると思うのですが、あまり持ってない人に持ってもらえるのが一番よい方法です。小金井のことを知らないのですよね。小金井のことを知れば知るほど地域というのは面白いものです。歴史も自然も人も食べ物も、そういうものを知れば知るほど大好きになります。そうすると自分も何か活動しようかという話になるので、そのような事業はとても大事かと思います。ちなみに「学び」とあるのですが、生涯学習の学びというのは無限にあって、よく学校教育的な学びという形になった学びと思うけれど、そうではなく、もっとちまちました、例えばおやじの会も学びです。活動すること自体の中にいろいろ学びがあって、気づきがあって、情報の蓄積があります。広い意味での学びともありますが、おやじの会のような活動を通して、地域とつながって、小金井にすごく愛着を感じてもらい、好きになればなるほど小金井のために、小金井市民のために今年度、子どもたちに向けて何かやろうかという話になります。そういうようなことができるよと思っています。他にも何かありますか。

北澤委員 資料2の内容で、第4次を見させていただいて、今回は体系図の案なのでこれから変わっていくのだと思いますが、私は障がい者関係の団体から出ているので、別に私が所属している障がいの関係だけではなく、全体として共生社会という言葉が前回の4次ではクロ

ーズアップされて1つのところで捉えられた部分がありました。こちらを見るとその言葉もないし、主な取組のところに、「障がい、言語を問わない学習機会の提供」となっていて、「言語を問わない」と「障がい」というのは違和感があり、違うような気がします。どういう意図でこのようになったのかも知らないのですが、ここに至った意図が何かあるのか知りたいです。

小林委員 これは外国人と障がいという部分で、そこは問わないという意味合いで書いてあると思うので、インクルーシブと言えればよい話だと思います。

濱松生涯学習課長 インクルーシブという部分もあると思います。4次では「共生社会」という文言が入っていましたが、今回、障がいという部分が弱いというところは認識しているところでございます。共生社会という言葉がよいのか、あるいはインクルーシブ、社会的コンセンサスといったところが生涯学習の中ではトレンドになっていますので、そういった言葉を入れるかどうかといったところ、また施策の体系図ではなく、例えば本文の中でそういったことの言及はできていると思っています。いただいたご意見の障がいといったところ、後は「言語を問わない」というのは外国籍の方がメインになるのですが、インクルーシブという言葉も含めて検討させていただきます。

笹井議長 国もそうですが、東京都は共生社会を前面に出しています。小金井はどうなのですか。

藤森委員 施策の方向性となったときに、下の2つは3つにわかれていて、上の2つだけ2つにわかれていきます。方向性をわけるときに、基本は3つにわけるのですが、その3つのわけ方がロング、ワイド、ディープになります。ロングが歴史、時間軸、これで言うと「0歳から100歳までの学習機会の提供と」になります。「一人一人のキャリア」というのは、ディープのより専門的な、地元ならではの、個性、またワイドという多様性という部分で、先ほどの外国籍や障がい、性自認というところの学ぶ機会の提供というように3つにわけたほうがよいのではないかと考えています。「障がい、言語を問わない」というところは2つ目に入っているのですが、わけてしまった

ほうがよいでしょうか。

笹井議長 生涯学習論の世界では、ライフロングという時間軸で続けることが大事であり、ライフワイド・エデュケーションではいろいろな学習機会に首を突っ込むのが大事ですし、ラーニングディープリーは深く学ぶことが大事だということですよね。

藤森委員 ディープの部分は、専門性、個性、特性など、小金井愛という部分です。ワイドとロングは時間軸であったり広域事業であったりします。ディープは小金井市ならでは、より小金井らしさといったものでもよいと思っています。3つに分けるということでは、1つ目の人づくりや地域づくり、イベント、場づくりで、確かにワイドとロングという感じで、広報的な部分はワイドという感じです。ICTを活用したというのはディープになるかと思います。ロングの部分は「学びとつながり支える環境整備」は長期的なサポートをしていく部分で、ロングという部分のほうが施設の整備が入ると、それは2つ目の場づくりや地域づくりのほうに入ってしまうのではないかと思ったので、単純にロング、ワイド、ディープと3つに分けるのですが、そのときに3つ目の真ん中の「社会教育施設等の充実」は2つ目に入れたほうがよいのではないかと考えています。

笹井議長 施策の体系は別にあって、ラーニングディープリーを考えていないから、特に学習機会の提供というと、どちらか2つの話になってしまうので、ディープリーと考えたほうが面白いかもしれません。

藤森委員 先ほど、共生という話がありましたが、より抽象的になっていってしまう気がします。施策の方向性、主な取組とあったときに、より具体的な話になっていくと、共生という言葉が使いにくくなってくるのではないかと思います。

笹井議長 共生という言葉を使うのであれば、もっと上位のほうがよいですね。

藤森委員 はい。そのように思います。ここの体系図の中では馴染まないもので、もっと具体的な言葉が入ってくるのではないかと思います。

笹井議長 目標としては共生という言葉はよいと思います。具体化して障がい者の人との共生になりますね。

金澤副議長 確かに、ここは障がいと海外の方はわけて3つにしたほうがよい気がいたします。そうすると共生という言葉を使わなくてもわかります。

藤森委員 また、先ほど小林委員が言われたように「提供」という言葉は今あるものを提供するだけでできるのであれば難しくはないし、例えば「子ども・青少年の学びの機会の創出」というようにしてしまうと難しすぎるとは思うのですが、提供はもう完成ですといった感じになってしまうかもしれませんので、この辺の言葉がよいものがあればよいと思います。

笹井議長 提供とは、お金をもらって提供するということになります。形になっていない学びも大事です。1番目の「学習機会の提供」は形になった学びに限ってもよいのではないかと思っています。なっていないところは別のいろいろな書き方があると思います。どうしてかと言うと、行政の場合は形になっていないと予算がつかいません。形になったものをまず念頭に置きましょうというのはよくわかります。

藤森委員 形になっていてもよいので、中身について、先生を呼んできてお終いではなく、もっと面白そうだと思う工夫をしましょうということだと思っています。運用の仕方と言うか、中身の質を上げるような形になればよいです。そのような学びにしていけないと続かないし、単発で終わってしまいます。

笹井議長 その辺りは工夫していただきたいと思います。他にいかがですか。

鈴木委員 あちこちで見聞きしたことを社会教育委員の会議で言うのはお前の役目だとある人に言われています。難しい話は皆さんにお任せします。それを落とし込んでいただいたらよいと思います。その前提

で、今この体系図を見させていただいて意見がいくつかあります。

まず1-1のア「青少年のための科学の祭典」です。僕はその事務局員ですが、現実を見ると青年はほとんどいません。幼児と少年の家族の祭典になっているので、青年の学びまで含めるという当初の意図があり、これを主な取組の「子ども・青少年の学びの提供」として、何か主要事業としてそこへ置くということであれば、もうひとひねりして「青年の学び」の検討が必要だと思います。

また、2-1のイです。これは質問です。「学びの中心人物の育成」は具体的にはどんな事業なのでしょう。

また、「YAサポーター」というのは何でしょうか。これは後でお答えください。

3-1のイと2-1のイとも関連するのですが、一番下のところに3-1のイ「相談体制の充実」に「学びを還元する」という言葉がよいのかどうかはわからないのですが、自分で学んだことを広めていきたといったときに、サポートするチームのようなものがあつたほうが現実にはよいのではないかと思います。例えば、意図を持って楽しいからやりたい、受講を学んだことを広げたいと思っても、現実には今、僕は中学校の文化委員というイベント委員をやっていますが、告知のチラシの作成から募集の仕方とか、初めての人には本当ハードルが高いわけです。誰もこなかったらどうしようと思うと、失敗を恐れて何もできなくなってしまいます。募集して例えば誰もこなかったという話になると、2回目のトライをしてくれる人は誰もいなくなってしまうと思います。ファーストトライだから失敗は失敗でよいわけですが、それをサポートするチームみたいなものがあれば、常に常設でなくてもよいのですが、よりよい運営ができて学びが広まっていくスピードが上がっていくのではないかと思います。

3つ目ですが、2-1のイです。僕は今、部活動の地域移行の検討委員も一緒にやらせていただいて、今ここでできないかなというアイデア提案です。スポーツ推進員の研修、学校ボランティアの派遣活動の中で、地域の方で部活動をご支援いただける方を募る仕組みをつくってはどうかと思っています。地域とその直下にある地域と学校のつながりづくりという点でもよいと思います。ここで「コミュニティスクール」ということが、地域と学校のつながりづくりということで一番高い位置に置かれていますが、正直自分があ

ちこち市内各校へ呼ばれていきますが、コミュニティスクールがうまく機能している学校はそんなにありません。31期の段階でコミュニティスクールの推進をということで、北澤委員、金澤委員と一緒にやらせていただいたのですが、未だにコミュニティスクールというものを理解していないというような印象です。それはなぜかと言うと、実際には本当に喫緊の話題で、顧問の先生の前向き度によって部活動の内容がかなり異なります。全然マッチメイクしない先生もいれば、マッチメイクを一生懸命する、指導も一生懸命するという先生がいて、現状の教員のやる気と好意に甘えた形での部活動ではなく、それは仕方のないことなのですが、今はもう現実に生涯学習と並行して走っている教員の働き方改革という点でも、教員に部活動をこれ以上負わせるのは無理だと思います。生涯学習の地域の話に戻りますが、幸いこの地域には各小学校の学童スポーツのチームがあつて、ご自身もその種目の競技経験のある方、ここでコーチをされている方、監督をされている方がいらっしゃいます。その方々は南中でも学童野球チームのOBの方が野球部の指導に当たっていただくというような形になっています。だから相当世代間は離れているのですが、世代のつながりがそこで生まれつつあります。もっとよいのは東中の事例ですが、学童コーチOBに指導してもらった中学生が、今度は高校生になり、大学生になり、また中学生を指導しに戻ってきます。だからすごくよい仕組みがあります。子ども会がなくなるとか、運営母体はほぼ高齢者になっていって、くるのは子どもたちといった形で世代間のつながりが失われているという中で、強制的につなぐということはなかなか難しいと思いますから、それを上手く活用するような形で生涯学習計画の中に、このスポーツ、部活動という視点でも盛り込んでいただくと、大いに資するものではないかなと思っています。

この3つです。「ボランティアの養成・支援」、その後の「学びと中心人物の育成」と「地域と学校つながりの推進」です。番号でいくと2-1のア、イ、2-2のアです。その辺りに入れていくことができる、よりよいのではないかなと思っています。部活動指導員に支払われている時給はスポーツ庁の基準である1,600円が基準なのです。例えば5時間やっってもらくと8,000円というお金が発生するわけですが、地域にいる学童野球の方やそういう教育経験のある人の時給を1,000円でやってくれないかという話をすると、

5,000円で済むわけです。3,000円が浮きます。現実に部活動指導員の予算の関係もあると思いますが、小金井市の部活動指導員というのは多分12、3人ではないかと思います。全活動です。だから圧倒的に少ないです。そこはコストを下げる事ができれば、部活動指導員という形で人を雇ってあげることもできるようになると思います。より一層よい循環が生まれてくると思います。新しいものをつくる必要もなく、今あるものを使ってよい循環がつかれるのではないかと考えています。それは主な取組、もしくは主要事業のところにに入れていただきたいと思います。以上です。

中心人物の育成とは具体的にどんな事業か、YAサポーターを最後に教えていただきます。以上です

笹井議長 ありがとうございます。YAサポーターとは何ですか。

鈴木公民館長 YAサポーターとは、中身としては貫井北分館で行っている事業です。小学校高学年から25歳くらいまでの若者が公民館で実施する講座の企画に企画段階から参画し、若者自身の問題意識に基づく主体的な学びを担う若年のうちから公民館に親しむことにより学びが循環する地域づくりにつなげるということを目的としているものでございます。年に5、6回の開催になります。令和5年度実績ですが、参加された方が述べ15名、中学1年生から大学2年生までです。

鈴木委員 子どもたちはYAサポーターとして具体的にはどのようなことをされるのですか。

鈴木公民館長 「夏にお勧めの本とPOPづくり」それから「ミステリーをテーマにした本やCDの紹介」、「私の一押しとして小説や本や版画など、自分が出会った中で一押しの作品を紹介する」といったものがあります。

鈴木委員 図書館でですか。

鈴木公民館長 そうです、北センターで。それから、「絵本とトークというテーマで好きな絵本の紹介を感染症対策に配慮してラテアートをつくっ

て楽しみ黙食などを行った」というものです。

鈴木委員 これは小学校高学年から25歳くらいまでの子どもたちが、自分たちで企画して実施するのですね。素晴らしいですね。

濱松生涯学習課長 続いて、中心人物に書いてあるイメージのところですか。平成30年度教育白書に、生涯学習の定義としていろいろなところを引用している文書がございまして、いわゆる学習だけではなくボランティア、スポーツ等広く含めて生涯学習という定義が為されています。例えばボランティアやスポーツ、そういうところも含めて中心になれるような方を養成するような事業も実施していますが、記述の際に改めて書ける事業、取組を精査して記載をしようと思っところでございます。

もう1つ、部活動につきましても、計画の中で部活動の地域展開について触れる必要があると思っところのが1点です。最近はそのほうにやっただけでございます。同時に今やっただけでございますので、何をどこまで書けるかといったところはかなり微妙だと思っところしております。今おっしゃったように、学校ボランティアの中で学校部活動に協力していただっところの方を調整するようなこともアイデアとしてあるかと思っところますが、誰が協力するかというところよりも、部活動を通して誰に協力してもらっところかという仕組みをまず考えるのが先になるのではないかと思っところます。これはスポーツ、運動部だけではなく、文化部も考えていかなければならないと思っところます。そのようなところを含めると、記載の仕方、位置づけや記載する場所はこちらで検討させていただければと思っところます。

笹井議長 ありがとうございました。他に何かござっところますか。

小林委員 中心人物のイメージというのはあっところたのですが、学校がボランティアでやればよいという話になりますよね。学校の先生も一杯一杯でできません。じゃあ代わりに探っところてきてあげるよとか、もしくはあそこに聞いたら誰か紹介してくれっところるよという感じで、中心人物とは地域に顔が広くいろいろな人を知っところっていたりつながっところっていたりします。そういう人たちは、今は天然ものですか。自然に育っところてきている人たちで、それをもう少し養殖して人材育成、人づくりをしてい

くという仕掛けをつくったり、何か考えなければならぬと思います。例えば公民館を使ったり、いろいろな社会教育団体を使ったりというところで何かできませんかというところを言っています。部活は学校で保護者のボランティアでやればよいのはわかっているけれど、どこに聞けばよいのかということです。僕もおやじの会で、誰も教えてくれないからビラを配ったりしました。いろいろなところを周りました。センターがあることもそこで初めて知りました。梯子をかけるのは大事です。そういう人たちを増やすような仕掛けがあるとよいです。

鈴木委員

まさに小林委員のおっしゃっている通りで、4キロ四方しかないこの小さなまちで、予算もないと言いつけているわけです。ALTはご存知ですか。外国人の先生が実際に授業をするものです。富裕自治体になれば常駐していますから、廊下などでもその先生とすぐに会話できるわけです。ただ小金井市の場合は、聞くところによると年に4週間、各クラスあたりにすると1時間、だから年に4時間しかこないわけです。外国人の先生と話す機会が年に4時間ですよ。この4キロ四方しかない小さなまちでやるのは、今も小林委員がおっしゃっていたように、あるものを使ってないものをつくれるかというところを根っこに置いたらよいと思います。

笹井議長

それは学習の成果や、今までのその人の経験がどう社会的な活用になるのかですね。ありがとうございます。

最後に、その他について何かございますか。

私から説明させていただきます。従前からお話しておりますように、宮地楽器ホールで都市社連協の大会があります。小金井市が幹事市になっています。我々が仕切るのですが、中身をどうするかという話になっております。調布の話がありましたが、調布は演劇をやるということです。ブロックではなくて、東京都23区を除いたその他の社会教育関係者の集まりです。少し大きな絡みになります。何をやるかと私が考えてきたのですが、候補としている先生の都合がつかなくてなかなか難しいというところがあり、厚かましいようですけれど私が講演をしようかと思っています。生涯学習社会教育の枠組みを少し説明させていただいて、小金井の取組、事例を少し出して、それについて論点を導き出して、それに向かっていろいろ

ろ議論するという形式を考えています。最終的には了解をいただいているのですが、何人かの実践者の小金井で活動している人に発表していただいて、関係者の参考になるような論点というものを導き出して、それについて議論していき、それを聞いてもらい、小金井はこんなことを考えているのか、この人こんなことをやっているのか、これはいいよねとか、これはちょっとまずいんじゃないなど考える機会を与えたいと思っています。そのようなイベントにしたいと思っています。もう少しでメンバーも確定するので、またいろいろな形で皆さんにはご報告したいと思います。12月13日の午後です。ぜひ参加してください。ご協力いただきたいと思います。タイトルは、全体のタイトルとして他人の課題を自分ごととして考えるというものを出しているのです、そこに収れんするようなタイトルにしたいと思っています。大体決めていて了解は取れていないので、2、3日待っていただきたいと思います。

次回の会議は11月13日ですので、施策事業などぶら下がっているものを含めて、案として皆さんにお示しできればと思います。その間、小委員会のご意見をお聞きするという形になると思います。

よろしいでしょうか。この辺でお開きにしたいと思います。

金澤副議長

皆様に助けていただきながら、事務局の皆様にもご心配をおかけして、委員の皆様が活発にご意見を交わしていただき初めでの議長の代理を無事務めさせていただきました。ありがとうございました。

笹井議長

それでは、これで終了いたします。ありがとうございました。

— 了 —